

---

# 学校ラブソディ

真鴉 里

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学校ラブソディ

### 【Nコード】

N6843F

### 【作者名】

真鵜 里

### 【あらすじ】

火災を知らせる警告音。放火犯は一体、誰か。壊れかけた、学校の行方は。ミステリーが大好きな、ダメな奴、が妄想を膨らませて勝手に謎を解き明かそうと、空回りする。それを冷やかに眺める、人生と学校にやや諦め気味な生徒と、何事も真剣に適当、がポリシ一の、その友達。学校って、人間関係って、自分って、何？探しながら、それでも、尚、緩く生きてくありふれた、物語り。

## 終わり

サイレンのウーウーという、獣の唸るような音が響き続けている。また、イタズラか。

拍手をする者もいる。

誰かの悪ふざけ。

子供の遊び。

呆れて溜め息がでる。

「またやったん。誰やねん。」

後方から舌打ちの音。

「ほんまな。これ2回目やんな。」

まあ、適当に返事をするが、その、断続的な音には妙なものがある。

すると、何処かへ行っていた、学級委員長が飛び込むように、教室に入ってきた。

「皆あ、座ってー！」

息も切れ切れに、力の限り叫ぶ。

異様な雰囲気にいよいよ、お祭り騒ぎ。

奇声を発しながら教室を駆け回り、押し合いへし合いする男子達を、眉根を寄せて眺めていると、

「男子、うるさいねんけど。鬱陶しい。」

虫がそこいらを飛び回っているときのような嫌悪を、顔一杯に表しながら、旭は話しかけてきた。

「どうしたんやろな。もしかして、ほんまに火事やったりして。」

冗談めかしながら、体を後ろに少し捻って旭に顔を向ける。

「それやったら、ヤバイやろ。」

二人でクスクス笑う。

もし、本当に火事なら、午後の授業が無くなったらいいなあ、なんて、お互いに数学嫌いの身なので、架空のピンチを想像しつつ、

無い無い、そんなこと、とジョークのように喋りあった。端的に言うと、

体育館が燃えた。

運動場の片隅に全校生徒を集め、状況説明が行われると、先程までとは打って変わって、笑う者は誰もいなかった。にやけ面が初期設定の、助平、浦賀でさえ口元は、緩んでいなかったから大したもんだ、火事。校長先生が、この異常事態に対してのこれからを、熱く語り終えると生徒は、それぞれの教室に帰された。

多分、校長先生の話しをまともに聞いていられたのは、余程の大人か、余程の真面目か、あるいは、事態の大きさに気付かない余程のとんちんかん、くらいの人々だろう。とんちんかんなら元々、話しを聞くことすら出来ないかも知れないが。

皆、その人々を除いた

皆、が気になって、気になって仕方が無いこと。

放火犯は、ダレか。

体育館に火を放ったのはダレか。

外部の犯行？

そんなの、ある訳が無い。

1ヶ月前から、ずっと、続いていることじゃないか。  
ボヤ騒ぎなんて。

この学校、

紅葉中学校、

終わったな。

## 何時も

「誰がやったん。」

ひそひそ声が、教室一杯に充満して、息苦しい。

「いや、まさか、マジに放火やったなんて、なあ。」

旭は、大して驚きもせず、新しく出たお菓子のCMを見た感想でも話す、口振りで言う。

「あ、でもまだ、放火って決まったワケ、ちゃうか。」

放火って決まったワケじゃない。

だからって、

自然発火

なんて、不自然だ。

今は、5月で、乾燥する季節でもない。そもそも、体育館に、火災の元なんて、あるのか。

「あのさあ、思うんやけど、放火犯は体育館やなくて、家庭科室とか、理科室に放火すれば、よかつたんちゃう。」

いきなり、この子は何を言いだすのやら。

旭は、やる気の抜け切ったブレザーを気にしつつ、楽しそうに話す。

「なんで。」

「自然発火に見立てて、連続して色々な教室を、放火したら、謎の発火事件として語り継がれるかもやん。」

「ムリやろ。」

ブレザーが1年前の、この頃に比べると、大分、よれよれになっているのと同じように、自分も何かが抜けて、なくなってしまうって、よれて皺だらけになって。

つまり、

脱力感。

「いいや、出来るかも知れへんで。」

旭はサンタクロースを待つコドモのように、夢を思い描く。

夢の思い描き方を、自分は、もう、忘れてしまった。

「皆あ、ほら、静かに。」

いつの間にもやら、先生が前に立っていた。

「午後の授業は」

教室内が水を打ったように、静まり返る。

「無し、になりました。」

「よっしやあああああ！！」

爆音の渦。

「やった。」

旭と軽く手の平を打ち合わせる。

特に何がどう嬉しいとか、そういう具体的なものはないが、周りの皆は騒ぎ立てる程、喜んでいたので、自分も精一杯、嬉々とした表情を浮かべてみせる。

「あ。」

ふと、旭が何かを思いだしたように、呟いた。

「え、何。」

「次の月曜から教育実習の先生が来るんちゃうかっただけ。」  
「そう言われれば。」

「こんなことになってんのに、大丈夫なんかなあ。」

「まあ、ある意味、最高にいい経験になるんちゃう。」

旭は、にやりと笑う。

「まあ、なあ。」

火事が起こった。

それよりも午後の授業がなくなることの方が、皆にとっては、  
— 大事なのだろうか。

新聞に載ることの方が。ニュースになることの方が。

体育館を使う運動部は、どうするのだろう。暫く、立ち入り禁止  
になる筈だ。練習はおろか、ボールの一つも、取りに行かせては、

くれないかも知れない。

それでも、

体育館が燃えた。

という事実より、

そういう、表面的な大騒ぎの方が、楽しく、心地良いものなのか。そういう、快樂も、自分は覚えていない。

事件は、決して、心地良いものでも、気持ち良いものでもない。

それなのに、

それだから。

異常が起こり、常ではなくなることと、祭り、祝い事は、同義か。

明日は、土曜日。

きつと、

常ではない、

何時もの土曜日だろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6843f/>

---

学校ラプソディ

2011年1月4日03時19分発行